世界とつながる教室

潮風が招く新たな出会い

人口約100万人の香川県には、人口の1%に近い9500人弱の外国人が住んでいる。地域の国際化が進む中、在住外国人へのサポートや多文化共生の社会づくりに取り組んできた公益財団法人香川県国際交流協会（アイパル香川）では、JICA四国と連携し、これからの社会を担う人材育成の一環として、地元の高校生など若い世代の国際理解促進にも力を入れている。

瀬戸内の島を巡って青空の下で国際交流

お盆を過ぎたばかりのある日、高松港（香川県高松市）のフェリー乗り場に、30人近くの高校生が集まった。目的地は、3年に一度開かれる瀬戸内国際芸術祭の会場の一つ、男木島だ。とはいっても、ただ現代アートを見て回ろうというのではない。アフリカから来日しているJICA研修員と交流し、自分たちの住んでいる地域について理解を深めることが、この日の一番の目的だ。

瀬戸内国際芸術祭では、瀬戸内海に散らばる12の島と高松港・宇野港（岡山県玉野市）周辺を会場に、さまざまな現代美術を展示している。「まるでキノコが歩いているみたいな、〝歩く箱舟〟っていう作品が楽しみです」「〝記憶のボトル〟という作品が気になります」と語る高校生たちは、島に着くと研修員たちと共に目的のアートを目指して散っていった。

香川県の名産品の一つ、漆器の技術を使って作られた漆の家を楽しむ

フェリーの上は、他のグループの参加者や研修員たちとの交流のチャンスだ

男木島でフェリーを降りる高校生と研修員たち。いつもと違う一日が始まる

強い日差しの中、島を回った高校生たち。芸術祭の期間中だけ開かれるカフェで一休み

男木島は、人口200人に満たない小さな島だ。日本の灯台50選に選ばれ、映画の撮影にも使われた灯台や、入り組んだ細い坂道など、瀬戸内海の島ならではの景観で知られる。瀬戸内国際芸術祭の期間は、島のあちこちに置かれた芸術作品に加えて、期間限定のカフェなどが店を開き、日本はもちろん海外からの観光客も数多く訪れる。この日は気温が35度にのぼり、強い日差しが照りつける中、高校生たちと研修員は細い坂道を巡ってアートを鑑賞し、島の町並みを楽しんだ。

「島の自然の中で、交流を深めてもらえれば」と語るアイパル香川の山下理香さんは、5年前に〝高校生カレッジ〟が始まった当初から関わっている。「そのころ、県内の高校生に対して、さまざまな人や文化と出会い、自分の将来についてより広い視点で考えるきっかけを増やしたいと考えていたんです。そこで、JICAの研修を受け入れていた公益社団法人セカンドハンドと共に企画した研修員と高校生の交流プログラムが、第1回目の高校生カレッジです」

予想以上に大きな反響があったため、それから継続して開催されることになった高校生カレッジ。現在は、交流編、実践編と、内容を変えながら年に数回開催されている。今回は予定していた人数の倍以上の申し込みがあり、参加枠を大きく広げたほどだ。

初期から大学生がスタッフとして参加し、高校生と一緒にイベントに取り組んでいるのも特徴だ。3日にわたる高校生カレッジの2日目に当たるこの日も、アフリカからの研修員と共に大学生スタッフも同行した。

言葉は完璧じゃなくてもいい勇気を出して交流に踏み出す

山下さんは、「毎回参加者が異なるので、今回はどんな雰囲気になるだろうか、と気になっていましたが、みんな積極的に研修員や他の参加者と交流していて安心しました」と話す。第1回目の高校生カレッジ参加者で、今回は大学生スタッフとして参加した山神藍さんも、「私が参加したときより、英語が得意でなくても、自分から一生懸命話そうとする参加者が多いのが印象的です」と言う。「高校生カレッジに参加して、世界には自分の知らないことがたくさんあると気付き、もっと外国語を学んだり、思い込みのフィルターをはずしたりしなければと実感しました」と振り返る山神さん。一方、今回参加した高校生の宮本歩佳さんは、「英語がなかなか上手く通じなくて大変だったけど、楽しい一日でした」と笑顔を見せた。

初日の自己紹介では故郷のダンスを披露した、モザンビーク出身の治水専門家、ヘラクリト・ロドリゲス・コミアさん。「芸術作品はとてもすてきでした。島を巡りながら、高校生たちとは学校の生活など、日常の話をしました」と振り返ってくれた。一方、スーダン出身で研修員唯一の女性だったアイーシャ・エルギリ・モハマッド・エレマムさんは園芸学が専門だ。「灯台は少し遠くて、歩くのが大変でしたが、風景がとてもきれいでした」と話すアイーシャさんに対し、同じ班の高校生たちは、「こんなに暑いのに、アイーシャさんは歩くのがとても速くて、追い付くのが大変でした」と笑った。

男木島での交流を終え、高校生カレッジの最終日の講座では、島での一日を思い出しながらグループごとに内容をまとめ、写真を添えて英語で発表した。

高校生が英語で発表する機会は、普段ならそう多くない。だが、慣れないチャレンジに対して、「これまでで一番英語を考えた」「英語を話すのが楽しくなってきた」「英語で自分の気持ちを伝えられてうれしかった」「グループのみんなで協力して、良いプレゼンテーションができてよかった」と、前向きな感想が多かった。その一方で、「島での交流の際、もっと相手の宗教のことを気遣えばよかった」など、自分に欠けていた視点に気付いた参加者もいた。

いまや、日本の在留外国人は200万人を超えている。国際交流の始まりは、手の届くところにいくらでも存在していると言えるだろう。地域の国際化を進め、異なる文化的背景を持つ人々が共生できる社会づくりに向けて、香川の若者たちの航路は瀬戸内の夏空のように晴れ渡っている。

これまでの交流を踏まえて、英語でプレゼンに挑戦